

土する朱を附したる石片と全然同等なり。大塚権現所在の円墳にも元来之と同様なる所謂箱式石棺を存せしなるべく、余が大正二年夏此塚に上りたる時においても恁る石片を出す事多からざる今日と大差無きによれば、高橋君の既に論述せられたる如く銅剣を出したる上述の古墳は大正二年よりも遙前に於て一度発掘せられたるは疑いなるべし。余は、此等の円墳を存セル丘陵付近を搜索して旧権現社地丘麓の民宅間の小圃に十二個の赤素焼土器片を発見し、尚黒曜石片一個を得たり。土器は今回目標として採集に努めたるものと同種にして、中に(8)及(10)と同式とみるべき口縁部は辺並(52)と同式なる底部破片を存せり。今回余の絵たる経験によれば丘陵ある地域における遺跡は目下田地となれる平地に臨める丘麓にあれども、大塚に於ては恰も恁る部が今率ね宅地となれるにより搜索甚だ困難にして、重ねて操作を施行せば多少の遺物を得る成るべしと推すれども、他地における如く有望ならず、此地尚頻回調査すべき必要あるにより姑く之を番外に置く。

(註)

- (1) 福岡藩によって編纂された「筑前三地誌」のひとつで、文化十一年(一八一四)年に『筑前国續風土記附録』の再吟味を命ぜられた青柳種信が、各地の調査報告書をもとに実地調査を行いながら編纂したもの。記述が実証的であることが特色とされ、考古学的資料としての評価も高い。

- (2) 下山正一他「糸島低地帯の完新統及び貝化石集団」『九州大学理学部研究報告』一九八六 九州大学理学部

- (3) 『前原町文化財地名表』一九七四 前原町教育委員会

- (4) 柳田康雄『三雲遺跡Ⅲ』一九八二 福岡県教育委員会

- (5) 岡部裕俊『泊桂木遺跡』一九九七 前原市教育委員会

- (6) 『糸島郡誌』一九二六 前原町第八章社寺村社八幡宮の項に「今より五六年前もと大塚にありし熊野神社を合祀せり。」と記されている。

- (7) 高橋健自「銅鉾銅剣考(一)」『考古学雑誌』六ノ十二 一九一六

- 高橋健自「銅銅剣考(三)」『考古学雑誌』七ノ二 一九一六

- (8) 泊八幡宮境内に掲げられた由緒書には、明治四十三年に大塚神社から合祀された旨が記されている。

- (9) 中山平次郎「九州北部に於ける先史原史兩時代中間期間の遺物に就て」『考古学雑誌』七ノ一〇 一九一七

- (10) 岡部裕俊「古記録に記された三雲・井原遺跡地内の古墳」『三雲・井原遺跡Ⅷ―総集編』二〇一三 糸島市教育委員会

- (11) 寺沢薫「纏向型前方後円墳の築造」『考古学と技術 同志社大学考古学シリーズⅣ』一九八八

- (12) 粗面玄武岩を用いた古墳として、東五反田遺跡箱式石棺墓(Ⅰ期)、篠原遺跡箱式石棺墓(ⅡⅢ期)、本林崎古墳(Ⅰ期)、センシュドウ古墳(Ⅱ期?)、御道具山二号墳(Ⅱ期)、一貴山銚子塚古墳(Ⅲ期)、鋤崎古墳(Ⅳ期)、丸隈山古墳(Ⅴ期)、釜塚古墳(Ⅴ期)などが上げられ、福岡地方でも、京ノ隈古墳(Ⅲ期)、老司古墳Ⅰ・Ⅳ号石室(Ⅳ期)など、前期Ⅰ中期前葉の古墳の埋葬施設に多く使用されている。

なお、以前、同種の石材を「安山岩」と誤認し報告した(井原Ⅰ号墳の測量調査「井原遺跡群」一九九一 前原町教育委員会)が、唐木田芳文氏に実査いただき粗面玄武岩である旨のご教示をいただいたので訂正する。

- (13) 唐木田芳文「石材」「老司古墳」一九八九 福岡市教育委員会

野市)、那珂八幡宮古墳(福岡市)などともに纏向古墳群に次ぐ規模を有する大型古墳の集中地帯を形成した可能性も浮上してくる。古墳時代開始期におけるわが国の社会動態を探るうえで、新たな検討課題を提示するものであり、引続きその解明に向けた調査研究が必要と考える。

史料①

青柳種信『筑前國續風土記拾遺』卷五十 志摩郡下

平成五(一九九三)年刊 福岡古文書を読む会 編校訂

熊野神社

大塚に在。此所の産神なり。処祭紀州熊野三所の神なりと云。祭禮九月_二廿二日也。此神社の地は大に築たる塚上也。本社のある所を強く踏は地下に鳴声あり。これ地中空虚あるか故也。石棺このうちに在へし。近年地下より獣の形に似たる石一ツ出たり。古昔の陵墓に立たりし石人石馬の類にしてこハ隼人に擬したる石狗なるへし。大和國添上郡元明天皇の陵の隼人石の類ひなり。圓丘高石階四丈一尺北面也。塚上の廣横四間入六間半有。四方に林木茂れり。南方に峽有。長拾壹間其尾の末に小山有。其の上平なる所六間有。是地道の入り口なるべし。大和國等にあるいにしへの陵の形状皆かくのこし。凡て此塚山の廻り八十六間有。其外ハ田なり。是むかしの池隄址なるへし。此塚ある故に人家をも大塚といふ。いにしへいかなる人の墳陵なりしやいままた其由を知らず。

史料②

高橋健自「銅矛銅劍考(一)」「考古学雑誌」六ノ十二
一九一六

筑前国糸島郡前原村大字泊大塚 二口

大塚といふは山頂にある古墳にして、石槨石棺の設なし。この古墳より管玉一個と共に発掘せられたりといふ。(和田千吉氏聞書)

史料③

高橋健自「銅矛銅劍考(三)」「考古学雑誌」七ノ二 一九一六
筑前国糸島郡前原村大字泊大塚 二口

遺跡は、丘陵上にある円墳にして、墳上社殿あり大塚権現と称したりしが、神社合祀の結果大正二年春社殿を撤したる際、地下一二尺にして銅劍残欠二個を発見したりなるといふ。踏査すると扁平なる割り石の面に朱の著きたるもの所々にあり。小口にあらで平なる面の主著きたるより考ふれば、組合式石棺の類ありしなるべく、大正二年より遙以前に於て発掘せられしものの如し。この墳より大塚の部落に至る間路傍田畔に一見碑の如き扁平なる割り石の立てるあり。里人鎌磨地藏と称し、これに触るれば祟有と伝う。是れ或は彼の石棺の一部分にあらざるか。発掘者に質すに銅劍以外は何物もなかりしといふ。前稿管玉一個伴いし由記したるは誤りなり。但し銅劍は糸島郡役所にては泊に保管せりとの事なりしかば、泊区長は始め発掘者等に就きて聞くに、郡役所に差し出したるまま未だ返らずとて、遂に見ることを得ざりしは遺憾なり。

史料④

中山平次郎「九州北部に於ける先史原史兩時代中間期間の遺物に就て」『考古学雑誌』七ノ一〇 一九一七

(附) 糸島郡前原町大字泊字大塚

此の地の丘上の円墳(旧大塚権現所在地)より大正二年春銅劍残欠二個を出したるは、既に高橋健自君の本誌七ノ二に説述せられたる所にして、銅劍発見地として一応此付近を踏査したりしに、以上の塚より西に当れる尾筋にも三つの円墳並存し、三墳中の下方の一に発掘の痕あるを発見したり。此塚最少にして高約一間に過ぎず。中央部に封土を穿ちたるところより其底部に当り薄き平石を立て函形に囲みたる幅約一尺の所謂組合式箱式石棺の端を露出し尚此の地上に大小の平石多く散乱せり。石棺の内面及散乱せる平石の一面には朱の附着を示し、石質大塚権現所在部より出



第5図 福岡付近における新生代玄武岩質岩石の分布と泊大塚古墳の位置
(『老司古墳』1989福岡市教育委員会図127をもとに作成)

写真 14 泊大塚古墳の後円部墳頂から古今津湾（近世干拓により耕地化）、博多湾方面を臨む



しかし、その一方で、古今津湾への眺望は、御道具山古墳よりも優れていることで、築造順について腑に落ちないところがあったが、今回、泊大塚古墳が纏向型前方後円墳である可能性が高まったことで、古墳の築造時期について再考が必要となった。

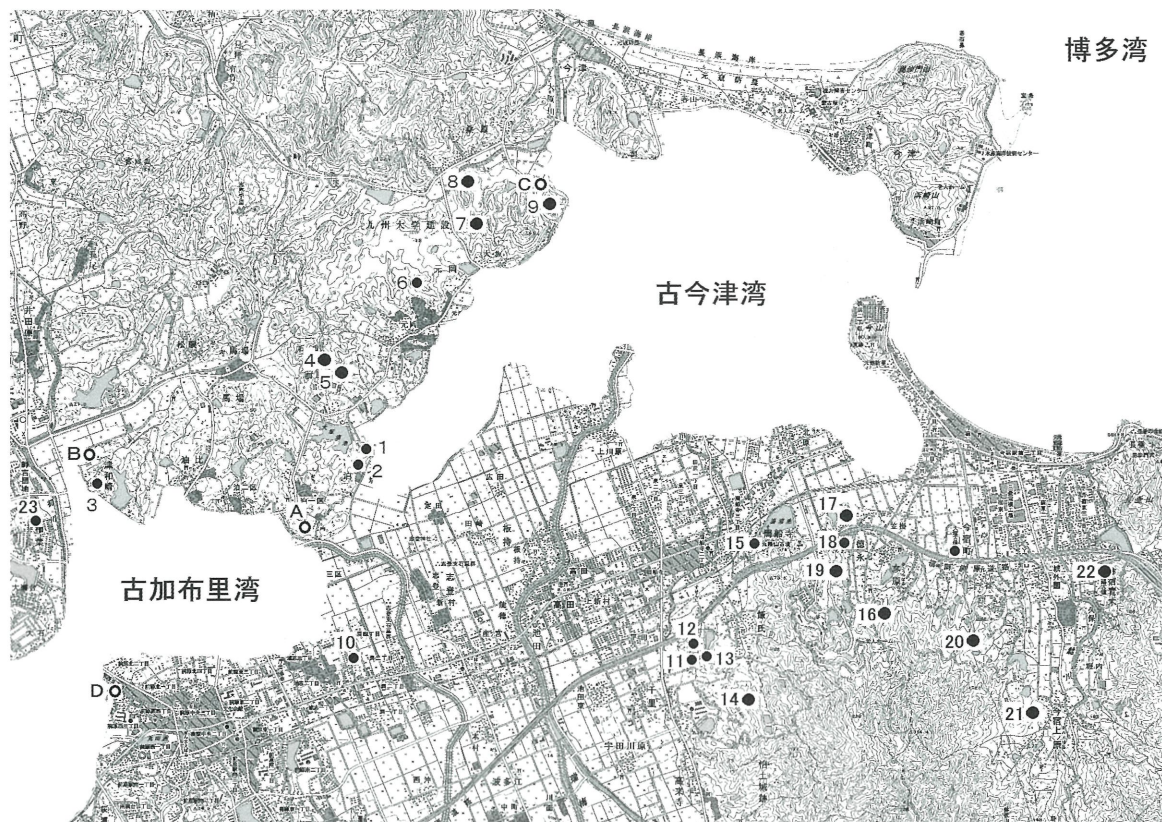
②について、当該地方で箱式石棺を埋葬施設とする前方後円墳として確認されているのは、高祖東谷1号墳、津和崎権現古墳、井原1号墳、荒毛2号墳などが知られているが、いずれも前期に位置づけられている。また、粗面玄武岩を用いた石棺を有する墳墓は本林崎古墳裾の箱式石棺墓、高祖東谷1号墳、津和崎権現古墳、東五反田遺跡箱式石棺墓など、当該地方における古墳時代初期の各地首長墳であり、泊大塚古墳が当該地方における最古段階の前方後円墳である可能性の高いことをさらに傍証する資料ともなる(註13)。

さて、板状剥離する粗面玄武岩の産出地は、当該地方周辺では限定的とされ、入手地としては相島(新宮町)、能古島(福岡市)、可也山(糸島市)などが有力候補地に挙げられている(第五図・註14)。

また、同種の石材を用いた古墳としては、竪穴式石槨を埋葬施設とした一貴山鏡子塚古墳、京ノ隈古墳などの前期古墳、初期横穴式石室として著名な老司古墳、鋤崎古墳、丸隈山古墳など、糸島・福岡両地方の前期・中期の盟主墳と位置付けられる古墳で顕著に認められることから、当該地方における大首長のステイタシンボルとして、これらの露頭から粗面玄武岩が優先的に入手された可能性が高い。

泊大塚古墳は、古今津湾の最深部の丘陵上に築かれており、古墳上に立てば、湾の全域を臨むことができる格好の位置にある。また、後円部径は四五・六メートルを測り、後代に築かれる丸隈山古墳に次いで古今津湾岸域における最大級の規模を有することを合わせて考慮すれば、当該古墳の被葬者が、古今津湾を拠点とし、玄界灘で展開された海上交通に深く関わった大首長であつたと推測され、能古島、相ノ島などの粗面玄武岩を優先的に入手し使用したことも頷ける。

今回の泊大塚古墳の検討成果は、当該古墳がこれまで当該地方における空隙期となっていた定型化前段階の前方後円墳が存在する可能性を示すものであり、さらに全長七六メートルの墳丘規模は、原口古墳(筑紫



①泊大塚古墳 ②御道具山古墳 ③津和崎権現古墳 ④峰古墳 ⑤元岡 E-1 号墳 ⑥元岡池ノ浦古墳 ⑦元岡石ヶ原古墳 ⑧桑原金屎古墳 ⑨塩除古墳 ⑩潤神社古墳 ⑪飯氏二塚古墳 ⑫飯氏鏡原古墳 ⑬飯氏塚原古墳 ⑭飯氏 B-14 号墳 ⑮丸隈山古墳 ⑯女原 C-14 号墳 ⑰山ノ鼻 1 号墳 ⑱若八幡宮古墳 ⑲下谷古墳 ⑳谷上古墳 ㉑今宿大塚古墳 ㉒鋤崎古墳 ㉓稲葉 1 号墳 A 大日古墳 B 後口古墳 C 経塚古墳 D 北側古墳

第4図 古今津湾の範囲と周囲における前方後円墳の分布状況

の企画の原則比に近く、その要件を満たしているものの、クビレ部の幅はやや太めである。

寺沢氏の分類に当てはめると、後円丘に連結部が形成されて平面形は倒卵形を呈し、前方部が直線的に開くⅡa型に分類されると考えられ、東田大塚、ホケノ山古墳と同様に属するものと考えられる。

なお、前方部の裾は、昭和三十六年の航空写真と現状を比較すると、埋め立てられ、現在も地下に埋没している可能性が高いと考えられ、将来、墳形の検証を行うことは可能と考えられる。

後円部に存在したとされる埋葬施設について、高橋健自、中山平次郎らの踏査・聞き取り調査の成果と、隣接する御道具山二号墳の発掘調査成果を相互に比較検証し、主体部が粗面玄武岩の板材を用いた箱式石棺ないしは竪穴式石槨である可能性が高いことを指摘した。泊大塚古墳は当該地においては大規模な古墳であるのに比して、箱式石棺一基だけというのは埋葬施設として寂しいものがある。竪穴式石槨他の埋葬施設の存在も考慮すべきであろうか。

最後に被葬者の性格について少し触れておきたい。当該古墳の留意すべき特徴として、

①前方部の平面形は低く短く撥型に開く「纏向形前方後円墳」の形状をとる。

②埋葬施設は板状剥離の粗面玄武岩を用いた箱式石棺であった可能性が高い。

③について、これまで当該地方の最古の前方後円墳は隣接して立地し、箸墓古墳と相似形の御道具山古墳とし、泊大塚古墳では埴輪が出土していないことも考慮し、当該地法における埴輪出現の指標となる鋤崎古墳に先行する前期中〜後葉の築造としていた。



写真 13 泊大塚古墳に祀られた立柱石（上）と
泊天満宮参道の板石の地蔵像（下）

出土遺物等 高橋、中山両氏の報告では、箱式石棺から二口の銅剣の出土が記されているが、いずれも聞き取り調査によるもので、現物を確認したものではない。古墳に銅剣が副葬される既往例は極めて稀でにわかには信じがたい。

一方、前述の御道具山二号墳では、調査時に二口分の鉄剣片が出土を確認したことは先に述べたが、材質が異なるものの、いずれも二口の剣が出土したとする報告内容の一致は気にかかる。発掘品の情報が泊大塚古墳と御道具山二号墳との間で入れ替わったことは想定できないだろうか。あくまで推測の域を出ないが、両古墳の埋葬施設がともに箱式石棺であったことが呼び水となり、相互の情報が錯さうした可能性も想起される。この場合、高橋の最初の報告にあった管玉の出土も、あながち誤りではない可能性もある。

また、古墳から掘り出されたもので留意されたのが種信が報告している「獣の形に似たる石」である。種信はこの「石」について、県南から中九州の中々後期古墳に広く分布する「石人石馬」、あるいは奈良市の伝那富山墓の墳周に樹立されている隼人石などを類品として提

示しながら考察しており、種信の幅広い知識の一端を垣間見せている。しかし、報告文に「石」の出土時期、その具体的特徴や計測値などが記されていないことから、種信はこの「石」を実見したのではなく、聞き取りによって得た情報だった可能性が高いと考える。

種信は、『筑前国續風土記拾遺怡土郡』において、三雲端山古墳の墳丘上に「石佛」が立てられていたことを報告しており（註10）ことから、古墳と石造物との関係に強い関心を抱いていたことが、この記述の背景にあったのかもしれない。

なお、現在、後円部上に立てられた祠には、一辺一五cm、高さ五〇cmほどの花崗岩の立柱石が祀られている。（写真13上）。また、高橋は古墳付近の道端で「鎌磨地蔵」と呼ばれる石棺の棺材のような扁平の立石を目撃している。現在、大塚集落の周辺では高橋の報告を想起させる地蔵を見ることができないが、古墳の西南西一・三kmに位置する泊天満宮の参道にある地蔵堂には石棺材とみられる粗面玄武岩の板石が地蔵として祀られており（写真13下）、高橋の報告を検証する上では留意すべき資料であろう。泊大塚古墳の埋葬主体は箱式石棺ないしは竪穴式石槨と考えられることから、この部材が先行して掘り出されていた可能性もあるのではなからうか。

五. おわりに

泊大塚古墳について『筑前国續風土記拾遺』の記録を足掛かりに新集資料も加えて、同古墳の規模・形状について検討を加えた。今回の成果は最終的には昭和三六年の古墳形状から検討を加えたものであり、築造時の形状にまで遡及して詳論することは憚られるが、期待も込めて述べれば、当該古墳の平面形が「纏向型前方後円墳」の特徴を示していることが指摘できる（註11）。後円部が倒卵形を呈し、前方部との接続部が緩やかにくびれ、前方部端に向けて低く小さく開く特徴は、まさに定型化前の前方後円墳の姿と言えるだろう。

現状から導き出される墳丘各部の法量比が墳丘全長…後円部径…前方部幅 76・46・33となり、3・2・1とする「纏向型前方後円墳」